

ブラタント・ビースト解釈—ヒドラ・シミリを契機として

An Interpretation of the Blatant Beast:
from the clue of the Hydra Simile in *the Faerie Queene* Book 6

祖父江 美 穂

Miho SOBUE

序

ブラタント・ビースト (the Blatant Beast) が『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-1596) の世界に初めて登場するのは第5巻の最終場面である。正義の騎士アーティガル (Arthegal) は探求の旅の最終目的であったグラントート (Grantorto) を倒し、見事アイリーナ (Irena) を救出する。国家に対する不正、不法、悪政の具現であるグラントートという正義の最大の敵を駆逐することで正義の力が最も発揮された後、アーティガルは妖精の宮廷に急遽召還される。そしてこの途上^{エンヴィ}ブラタント・ビーストと2人の老婆、嫉妬^{デトラクション}と悪口に出会う。

アーティガルはこの怪物とは戦いもせず、彼らの前を通り過ぎようとするが、そのすれ違いざまに投げつけられた蛇に咬まれて背に傷を負ってしまう。ブラタント・ビーストは、すなわち“blatant”「騒々しい、口やかましい」という意味のスペンサーの造語である。つまり「口害」そのものであり、人間の妬み、誹り、悪口を指す。そしてビースト“beast”は、実際の獣という意味もあるが、怒りや嫉妬などの人間の悪しき心が手に負えなくなり荒れ狂うような意味での獣性をも意

味し、ブラタント・ビーストは人をおとしめようと目論む悪の心、すなわち人間の心に巢喰う獣性をあらわす怪物であることがわかる。

ブラタント・ビーストを含めて彼らは3人であるが、悪の三位一体とも言うべく、根本的にはこの怪物の中に悪口も嫉妬も包含される。それゆえ、三者は同質の存在であると言える。そしてこの怪物は、いくら相手にせずとも、正面向かってではなくむしろ卑怯にも背後から容赦なく傷つけてくることがわかる。正義の徳を体現する騎士アーティガルでさえ傷を負わせるこの怪物の退治は、第5巻では何ら解決をみることなくそのまま放置され、第6巻に持ち越されることになる。礼節を体現する騎士キャリドア (Calidore)こそがブラタント・ビーストに対抗できる唯一の存在なのである。

ブラタント・ビーストとキャリドアとの最終決戦は第6巻の第12篇の後半部分を割いて述べられる。その中で特に注目に値するのは、戦いのクライマックスで次々と畳みかけるように連続する3つのシミリである。両者の戦いの様子が、去勢牛のシミリ、ヒドラのシミリ、そしてケルベロスのシミリを通して描き出されていく。

シミリとはテキストの地の文、つまりストーリー上の行為や関係を他の複合的な要素と比較するものである。つまり本文に対して全く異なる世界を提示し、その中に物語りや一幅の絵画のような世界を展開するのである。古典においては、ホーマーなど、緊迫した場面を中断しての息抜きや場面転換、もしくは本文をさらに飾り立て壮大なスケールを付与するものとして使われたとされる。

しかしながらスペンサーのシミリは、キャリドアとブラタント・ビーストとの戦いを中断し、クライマックスを引き延ばしているだけではない。その効果は単に似ているエピソードの挿入ではなく緻密に組み込まれ戦いの経緯を方向付けていく役割が付与されていると考えられる。つまりシミリを用いることによって初めてこの戦いの本質が明らかになると言えるのではないか。そこで本論では連続するシミリのうち特にヒドラのシミリを中心に読み解いていくことによって、ブラタント・ビーストという怪物の本質に迫る。

1

まず、シミリを用意する戦いの経緯をたどっておこう。無理矢理押さえ込むキャリドアに対して、ブラタント・ビーストは猛烈な勢いで抵抗するが、キャリドアもビーストを倒しきれず、なかなか決着がつかない。

Tho rearing vp his former feete on hight,
He rampt vpon him with his rauenous pawes,
As if he would haue rent him with his cruell clawes.
(12, 29, 7-9)

このように荒々しい猛獣が自らの武器である四肢を駆使して飛びかかるさまは、怪物というよりもむしろ獣^{けだもの}じみた抵抗とも言える。

怪物と獣の関係は後に検証することになる

が、ブラタント・ビーストは猫や犬の舌もち、相手に対してひっかきかみつくなど、ここでの戦いぶりは滑稽さすら漂うという指摘もある（Oram 261）。確かにクライマックスでの戦いにしてはこの描写は、第1巻のレッドクロスナイトとドラゴンとの戦いのようなスケールの壮大さは乏しく、卑小感がぬぐえないかもしれない。しかし逆に獣^{けだもの}じみた格闘の描写は、続くギリシア神話に登場するヒドラという怪物のシミリにより、戦いの世界は地上世界から神話レベルの戦いへと高められ、質的变化を遂げる。シミリを通して地上的外見を持つビーストは神話内在の本源的悪の存在へと迫ることになる。

ヒドラ・シミリで描き出される戦いは、アルキデース、すなわちヘラクレスによる、いわゆる12の偉業のうちの第2番目に数え上げられるレルネのヒドラ退治を指す。ヒドラはテキスト上で“hell-born”と記されるのだが、地獄で生まれたというトポスの問題よりもその地獄の血統を強く喚起させる。

ヒドラは、父テュポンと母エキドナの間に生まれた、レルネのアミュモネという泉に住むという水蛇の怪物である。¹ テュポンは百の蛇の顔を持ち、それぞれには黒い舌がはえているとされる。その目からは火を吐き、恐ろしい口は犬のように吼え、雄牛のように猛る不死の怪物である。ゼウスでさえもテュポンを殺すことはできず、手を焼いたあげく島を投げつけ、ようやくこれを退治をしたという。それがシチリア島であり、エトナ山から立ち上る噴煙はテュポンがはき出す火だとされる。一方母のエキドナは、上半身が美女でありながら下半身が蛇の怪物であり、これらから生まれたヒドラはまさしく地獄の系譜の中に生まれた怪物である。

ブラタント・ビーストもまたヒドラと同じような系譜の中に位置する怪物として創作さ

れている。キャリドアは第6巻の冒頭で、アーティガルに出会ったときにビーストの所在を訪ね、彼にこの怪物について説明している。すなわち、「地獄の種族から生まれたもの (It is a Monster bred of hellishe race)」(1, 7, 7) とした上で、次のように述べている。

Of *Cerberus* whilome he was begot,
And fell *Chimaera* in her darkesome den,
Through fowle commixture of his filthy blot;
Where he was fostred long in *Stygian* fen,
(1, 8, 1-4)

地獄の番犬であるケルベロスは元来ヒドラと同じ親から生まれたとされている。またキメラは獅子、山羊と龍の三種類からなる体を持った火を吐く怪物で、やはりテュボンとエキドナの間に生まれたものとされる。

しかしまた、ブラタント・ビーストの出生については次のようにも言われている。

To her [*Echidna*] the Gods, for her so dreadfull face,
In feafull darkenesse, furthest from the skie,
And from the earth, appointed haue her place,
Mongst rocks and caues, ...
There did *Typhaon* with her company,
Cruell *Typhaon*, whose tempestuous rage
Make th'heauens tremble oft, and him with vovs asswage.
(6, 11)

このふた親から生まれたのがブラタント・ビーストだという。ここで述べられる天と地から遙かに離れた暗闇とは地獄を指し、親は違っているが地獄の出生という点では先に掲げた引用と同じである。こうしてヒドラやケルベロス、キメラと同じ親から生まれたのであらうとも、もしくはその怪物を親に持っている

にしろ、ブラタント・ビーストは地獄の怪物の系譜の中心に生まれ育った、悪の血が凝縮された恐ろしい怪物であることがわかる。

ブラタント・ビーストは実際の神話上の怪物ではなくスペンサーが創造したものである。しかしこの怪物は、上述のように神話上のヒドラと同位置になる。ヒドラ・シミリは、ブラタント・ビーストの一見コミカルにも見える戦いを誇大表示するために拡大投射させようとして使われているものではない。この怪物の戦いがヒドラと全く同等の地獄の力に対峙する戦いを描いたものであると言えよう。

2

それでは、ヒドラ・シミリのテキストから実際にブラタント・ビーストとキャリドアとの戦いの本質を探っていこう。

Or like the hell-borne *Hydra*, which they faine
That great *Alcides* whilome ouerthrew,
After that he had labourd long in vaine,
To crop his thousand heads, the which still new
Forth budded, and in greater number grew.
Such was the fury of this hellish Beast,
Whilest *Calidore* him vuder him downe threw;
Who nathemore his heauy load releast,
But aye the more he rag'd, the more his power increast.
(12, 32)

鍵となるのは上掲の引用の中の“Such was the fury of this beast”という一文である。ここではブラタント・ビーストの“fury”を語るためにヒドラ・シミリが用いられていることがわかる。ヒドラの“fury”とは、自分を倒そうとするヘラクレスに対して向けられるものである。ヘラクレスが次々と首を切り落としていこうとも、ヒドラの首は一つ切り落とされれば、それが倍増する。つまり

やられればやられるほどに逆にヒドラの力は無限に増していく。悪の力は不滅である。

このヘラクレスの戦いでは、「無駄に長々と徒勞をしたあとで」（12, 32, 3）と述べられているように、頭を切り落とすことではヒドラは倒せない。結局ヘラクレスはイオラオスの手を借りて頭を焼きつくし、最後に残った不死の頭は土中に埋めて上から岩で押さえつけることでヒドラを退治した。つまりヘラクレスほどの英雄であろうとも、ヒドラを一人では退治することができず、また不死の頭はそのまま土中に残っているのである。

一方ブラタント・ビーストの戦いにおいては、ヒドラのように首を切り落とされているのではなく、またこの怪物の最大の武器である舌を切り取られているのでもない。今、まさにキャリドアに力づくで押さえ込まれているところである。しかしブラタント・ビーストは、キャリドアが加えるその力に対し、さらに力を増していく。これはヒドラの不死の頭が、土中に埋められて上からさらに岩石で押さえ込まれている様と重なり合う。神話の場合はそれをもってヘラクレスの勝利となったのだが、今、ブラタント・ビーストはキャリドアという「重たい荷 (his heavy load)」（12, 32, 8）をはねのけることはできずとも、その押さえ込む力に対して暴れ狂い、ますます力を増大させていくのである。これがブラタント・ビーストの“fury”である。そしてヒドラを上回るさらに恐ろしい不滅の力である。

ヒドラ・シミリの冒頭では、ヒドラは「アルキデースがかつて打ち倒した」（12, 32, 2）と予めヘラクレスの勝利が明らかにされている。そしてブラタント・ビーストの方は「先に恐ろしい思いをしたことによって、騎士に死に至らしめられることを分かっていた (Knowing his fatall hand by former feare)」

（12, 25, 8）。つまりビーストは勝つことができないことが予めわかっており、この怪物に対するキャリドアの勝利はすでに確実視されている。それでもヒドラ・シミリが用いられているのは、単に正義の力の前に悪が敗北する定めにあることを言うためではない。シミリにおけるヘラクレスの勝利は、キャリドアの最終的なブラタント・ビーストに対する勝利の予期表示（プロレプシス）になっながらも、むしろ悪の殲滅しがたい力を強調するものとなっている。

3

では次に、ブラタント・ビーストの最大の特徴とも言える口の力について見てみよう。世界中を荒らし回った後に修道院を攻撃しているビーストは、最奥の聖壇にまで入り込んでいる（12, 24-25）。そこでキャリドアに見つけられ、追いつめられると今度は一転してこの怪物はキャリドアに挑みかかっていく。その最大の武器である恐ろしい口は次のように描写される。

And therein were a thousand tongs empight,
Of sundry kindes, and sundry quality,
Some were of dogs, that barked day and night,
And some of cats, that wrawling still did cry;
And some of Beares, that groynd continually,
And some of Tygres, that did seeme to gren,
And snar at all, that euer passed by: (12, 27, 1-7)

さらにこれらに加えて、蛇の毒や悪口雑言に至るまで、ありとあらゆる醜い口害で描写される（12, 27-28）。「千の舌」とは、実際上の舌の数が膨大であることをも意味するが、数だけではなく種類も膨大である。上記の引用の中で描き出される動物は、犬や猫といった小動物から次第に熊、虎というように大型

化し凶暴性を増していく。それでもこれらは架空の怪物ではなく、現実世界にも存在する動物の舌や声である。この獣が最も恐ろしいのは次のものである。

But most of them were tongues of mortall men,
Which spake reproachfully, not caring where nor when.
(12, 27, 8-9)

人間の声は虎や熊の猛り声に比べればその迫力には劣るであろうが、何よりもその話す内容が猛獣の比でなく恐ろしいのである。恥辱に満ちた言葉をわめくのは、人に対する危害という点において、上記の獣よりもはるかに有害なのである。

そして「三つ又に分かれて刺をもった蛇の舌がそれらの中のあちこちに織り交ぜられており (them amongst were mingled here and there,/ The tongues of Serpents with three forked stings)」(12, 28, 1-2)、この蛇が毒や血糊をはき出している。三つ又に分かれた舌は、悪魔を連想させるものである。ゆえに、人間の舌と混ざり合って悪魔の蛇の毒を持った舌が共存しているということは、両者が深く結びついた一体の存在であることを表している。つまり、単に人間の誹謗中傷の悪しき言葉ではなく、それに悪魔的な蛇の毒が加わり、獣の鳴き声とは比べものにならないほど恐ろしい、悪の力の増した言葉の攻撃力を持っているのである。これらの言葉は人間を傷つけるためのものであり、それらをはぐみはき出す怪物の口はまさしく恐ろしい「獣性」そのものであると言えよう。そして時も場所もわきまえず、さらに身分にもかかわらず毒の言葉がはき出される。それゆえどれほど高潔な騎士であろうとも、正義の騎士アーティガルに対しても危害が及んだのである。

また、ブラタント・ビーストは決まった場所にいる他の巻の怪物とは異なり、定まった居場所を持たない。キャリドアが途方にくれ、全世界を探し回るのもこのためである。言い換えれば、ブラタント・ビーストは偏在の怪物である。キャリドアはこの怪物が通り、略奪し尽くしたこの世のありとあらゆる場所を見て、最終的に神聖な修道院の最奥にいるのを発見したとされる(12, 23-25)。世俗であろうが宗教界であろうが、この世であればブラタント・ビーストの危害から逃れられる場所はないのである。

こうしてブラタント・ビーストの口は、獣が敵を威嚇したり獲物を囓んだり飲み込んだりするための口ではなく、地獄から害悪をこの世にはき出す噴出口であると言えよう。

4

前章において検証したブラタント・ビーストの口の力は、キャリドアとの戦いの中でヒドラ・シミリの後、大きく力を振るう。怪物は自分を押さえつけてくるキャリドアを押し、のけようと反撃の力を増していったのだが、これはただ物理的な力では終わらない。怪物の力が増すことで、同時にその最大の特質である口による攻撃が誘発される。

Tho when the Beast saw, he mote nought auaile,
By force, he gan his hundred tongues apply,
And sharply at him to reuile and raile,
With bitter termes of shamefull infamy;
Oft interlacing many a forged lie,
Whose like he neuer once did speake, nor heare,
Nor euer thought thing so vnworthily:
(12, 33, 1-7)

上掲の引用において、ブラタント・ビーストはキャリドアをしのぐ力をこれ以上出せない

と分かったという。しかしシミリで表されたヒドラのように、そのまま押さえ込まれてしまうのではない。「沢山の舌を加え始めた」と言うのは、キャリドアをはねのけようとする力にさらに加えられるものである。すなわち舌の力もまたビーストの増大する力である。むしろこれこそが、シミリで暗示された怪物本来の不滅に増大する力である。

その力は先に述べられていた虎などの獣の声ではなく人間の言葉であり、毒のある中傷や誹りだけが強調されている。ブラタント・ビーストの口から「ねつ造された沢山の嘘をおりませつつ」はき出される毒の言葉は、その多くが嘘でありながら、全てが架空のものではない。逆に言えばその中には真実も含まれていることになる。これがこの怪物の恐ろしい点である。アーティガルに傷をなした嫉妬^{エンヴィ}は、実際、「人の良い行いに対してけちをつけたり曲解したり（To hearke what any one did good report,/ To blot the same with blame, or wrest in wicked sort）」（Book 5, 12, 34, 8-9）している。このようにどれほど正しい行いをしていても、むしろしているからこそみまわれるのがブラタント・ビーストの避けがたい災禍であると言えよう。

しかしながら、キャリドアの力はこのビーストの反撃にも屈しない。それはキャリドアの徳の力がビーストの口の力を上回っているからである。彼はブラタント・ビーストをしっかりと縛り上げると、怪物を「殆ど窒息させた（that chokt him near）」（12, 33, 9）。そしてしっかりと怪物に口輪をはめて完全に征服し、服従させることに成功した。口を征服することでビーストの不滅の力を封じ込めたのだ。キャリドアがここで最後のとどめを刺さずに、完全に怪物を窒息させ息の根を止めるには至らないのは、シミリで言及されたヒドラの不死の頭が焼き殺されず土中に埋め

られ、岩で封じられるのと同じである。

キャリドアはアーティガルのようにブラタント・ビーストの毒によって傷つけられることはない。なぜであろうか。キャリドアによる「礼節」の敵ブラタント・ビースト退治の勝因と限界を考えよう。

5

「礼節（Courtesy）」の騎士キャリドアがブラタント・ビーストを退治する力は彼の備える徳目の「礼節」の力である。そして彼がビーストを退治するのは、宮廷（court）に本来の宮廷の姿を取り戻すためである。しかしキャリドアは第6巻を通して常に宮廷から遠く離れている。これは他の巻で冒険を行う騎士たちと同じである。しかし、これらの騎士と宮廷との注目すべき関係が、唯一ビーストに遭遇しているアーティガルからうかがい知ることができる。³

アーティガルはアイリーナ救出の後、宮廷に召還され戻る途中に、しかもアイリーナの島へと出発したその元の岸辺に戻ったときにブラタント・ビーストに遭遇している（Book 5, 12, 28）。元の岸辺とは彼を派遣した宮廷のある場所である。⁴ すなわちこの怪物は宮廷に近寄れば近寄るほどその力を発揮するものであることがわかる。

ビーストと宮廷との関係については、さらに第6巻の別のエピソードからも指摘することができる。ビーストによって傷つけられたアーサー（Arthur）の従者ティミアス（Timias）と美女セリーナ（Serena）は、その傷を癒すため森の中の隠者の庵に身を寄せる。隠者は二人に丁寧に治療を施しながらも、ビーストの傷を免れるものはない、と諭す。しかし隠者はその対処法について次の様に述べる。

The best (sayd he) that I can you aduize,
Is to auoide the occasion of the ill:
For when the cause, whence euill doth arize,
Remoued is, th'effect surceaseth still. (6, 14, 1-4)

隠者はこのように、災いのもとを避けることが怪物の災禍を避ける最善の方法だという。災いが起こる原因がなければ、ブラタント・ビーストを招き寄せることも、またそのようなものを自らのうちにはぐくむこともない、というのである。そしてビーストの対処法を語ることができる隠者が今遠ざけているものこそがこの災いであろう。

彼はティミナスと美女セリーナに適切な忠告を行い、怪物の傷や被害についてよく知識をもっている。また、「言葉のすべをよく心得ている (he the art of words knew wondrous well)」(6, 6, 3) とされる。つまり悪しき言葉の力のブラタント・ビーストに対し、隠者は良い言葉の力を備えていることがわかる。⁵ キャリドアとは違い、悪しき言葉の力を打ち負かすことはできないとしても、その力をよく認識し避けることもできるのである。この隠者は若き日には名をはせた勇猛な騎士であり、年を経てすっかり世から退き庵を結んだという。それゆえ世から退いたという隠者が避けているものが「世」、すなわち騎士であった彼にとっての「宮廷」である。つまり世の中で宮廷ほどブラタント・ビーストが猛威を振るっている場所はない、ということになる。それゆえ、宮廷から最も離れた森の最奥の庵でこそ、隠者の良い言葉はビーストの傷に力を発揮することができる。

隠者のエピソードからもわかるように、宮廷に近づくほどビーストの威力は増し、宮廷から離れるほどビーストに対抗する力が増す。同様に、キャリドアもまた宮廷から離れているからこそ、彼の体現する「礼節」の力を十

分に発揮できると言えるのではないか。⁶ 最後に彼の怪物の捕縛する場面からそれを検証しよう。

結論

キャリドアはすでに見たように、ブラタント・ビーストの口の力をも凌駕したのち、完全にこの怪物を押さえ込むことに成功する。そして次のようにしてブラタント・ビーストを捕縛する。

... he tooke a muzzell strong
Of surest yron, made with many a lincke;
Therewith he mured vp his mouth along,
And therein shut vp his blasphemous tong,
(12, 34, 2-5)

このように、彼は沢山の輪が繋がったしっかりとした鎖を用いてブラタント・ビーストの口を封じ込める。ここで述べられる鎖の輪は「沢山」繋がってできたものである。キャリドアは自分一人の力でビーストを押さえつけたが、その力を封じ込めるには「沢山の鎖の輪」の力が必要である。鎖の輪は“link”と記される。つまり輪の結びつきである。これは人と人とが輪/和をもって結びつくことをも連想させる。ビーストの持つ沢山の舌、すなわち沢山の毒の言葉は、一旦増え始めればとどまるところを知らず、滅しがたくなる。そしてこれは宮廷内の人間を攻撃し、傷つけ、人間関係を断ち切ってしまうものである。

現実社会を荒らし回るビーストは、この世のありとあらゆる場所と状況の下で力を発揮し、増殖し続けている。いくら正しいことを行っても一旦その毒牙にかかれば傷を癒すことは宮廷内にあれば不可能であり、宮廷内での“link”はもろくも崩れ去ってしまう。それが第5巻でビーストに傷ついたアーティガ

ルの姿であり、すなわち、現実社会のグレイ・ド・ウィルトンである。スペンサー自身が一人ではどうすることもできない無力を感じている。グレイを取り巻く環境は厳しくなる一方で、彼の周辺のそれまでの関係は断ち切られていってしまう。⁷ スペンサーは悪しき言葉に傷つき孤立していくグレイに対して、悪の力に立ち向かえる理想の力をもった騎士、すなわち「礼節（Courtesy）」の騎士キャリドアを設定した。そして皮肉なことに、このキャリドアは宮廷を離れているからこそ、その力が発揮されるのである。

ヒドラの不死の頭と同様、ビーストもまた完全に息の根をとめられてしまっているのではない。神話世界ではヒドラの頭上を埋める岩をどけるものは現れないが、逆にブラタント・ビーストの捕縛はその後の現実社会の中でほどかれてしまうことが暗示される。人間が対抗することができない悪の力は古典古代の世界においても、スペンサーの時代においても変わらない問題である。ヒドラ・シミリは、普遍的テーマを古代のモデルを用いることで現実社会の問題を浮き彫りにしている。そしてスペンサーがその問題を超えていく力を作り出しながらも、「宮廷にない」宮廷の力としてしまったところに、逆に現実の難しさを強調することになってしまった。ブラタント・ビーストの鎖は壊され、怪物は現実社会にのさばっている。怪物の力を封じておくことができるのか、そして戒めをほどこかは、後の世の問題として委ねられている。

- 1 本論におけるギリシア神話の言及はアポロドーロスの『ギリシア神話』（高津春繁訳、岩波文庫）による。
- 2 キャリドアはアーティガルと出会ったときに導き手もないまま、世界中をあてどなく探し回っていることを語っている。Book 6, canto 1, 6-7 参照。
- 3 本論ではブラタント・ビーストによる攻撃は、宮廷内の個人に対する外からの攻撃としてとらえるが、Hankins はビーストとキャリドアの戦いは、個人に内在する舌禍との戦いであるとしている（192）。
- 4 アーティガルはキャリドアと出会った時、派遣されたアイリーナの島、すなわちアイルランドを「荒れ島」と呼び（1, 9, 1）、彼はこの島へと出発したもとの岸辺、すなわちイングランドに戻ってからブラタント・ビーストに出会ったことになる。明らかにビーストはイングランドにいる。
- 5 隠者の言葉の力と宗教的関連については、Mallette（183）と Weatherby（191）を参照。
- 6 田園は宮廷から最も離れた場所とされる。しかし Hadfield は田園でさえも悪に脅かされているとする（135）。それは悪の力が偏在であるゆえだろう。だが宮廷でないからこそキャリドアの力が発揮されるのである。
- 7 スペンサーは *A View of the present State of Ireland* において、アイリーニアスにグレイ・ド・ウィルトンの苦境に言及し、彼の立場が悪くなったことにより、かつて温情を受けていた人々の中にも逆にグレイを避難し始めた人が数多くいたことを明らかにしている。*A View*, pp 103-104参照。

参考文献

- Hadfield, Andrew. "The Faerie Queene, Book IV-VII." *The Cambridge Companion to Spenser*. Ed. Andrew Hadfield. Cambridge: Cambridge UP, 2001, 124-142.
- Hankins, John Erskine. *Source and Meaning in Spenser's Allegory: A Study of The Faerie Queene*. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Mallette, Richard. *Spenser and the Discourses of Reformation England*. Lincoln: Nebraska UP, 1997.

Oram, William Allan. *Edmand Spenser*. New York: Twain, 1997.

Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland*. Ed. Andrew Hadfield and Willy Maley. Massachusetts: Blackwell, 1997.

—. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. London: Longman, 2001.

Weatherby, Harold L. *Mirrors of Celestial Grace: Patristic Theology in Spenser's Allegory*. Toront: University of Tronto, 1994.